

コラム43:戦後歌謡 その3 (2015.6.14)

あなたは歌手の「笠置シズコ」を知っていますか？彼女を最初に見たのは、私がまだ少年の頃だと思います。テレビのドラマの脇役の「オバサン」を見て父が私の側でつぶやいたのです。「この人は昔は歌手じゃったんじゃないけえのう」「ヘー、ほいじゃあ昔は若くてきれいじゃったん？」「きれいなこたあないよ。顔をよう見てみい」「……」私は納得しました。父とそんな会話をした記憶があります。そして、＜彼女＞の存在の大きさを認識するには、それから10年の歳月が必要でした。

1970年代初頭、私が学生で東京にいた頃です。笠置シズコを評して「日本における最上のジャズボーカルである」という評論家が現れたのです。(注1)しかし、その時の私は全くそのような実感をもちませんでした。私が本当の出会いをしたのは、その後どこかの名画座で見た「酔いどれ天使」でした。戦後まもない昭和23年の黒沢明(注2)の名作です。この映画のダンスホールのショーの場面にいきなり登場したのが、彼女の歌う「ジャングルブギ」です。

♪～ウワオ ワオワオー わたしは女豹だ 南の海は
火を吐く山の ウワオワオワオ 生まれだ～♪



激しいリズムとダイナミックな踊り、すさまじいビートのきいた歌唱、これこそ全身で歌いまくる「体当たり唱法」。これが「笠置シズコの世界」だったのです。この「ジャングルブギ」は黒沢監督が自ら作詞しており、作曲は「東京ブギブギ」の服部良一(注3)です。直立不動でしっとりと謳いあげるといふ形が常識の時代に、あえてリズムとダンスを主体にした曲を登場させたのです。

作曲した服部良一は、戦前からの人気作曲家ですが、戦中はいわゆる「軍歌」の依頼を断固拒否、戦後になって「リズムから曲を考えて」、「ブギブギ」ブームの先駆けとなった「東京ブギブギ」を世に出しました。この歌の歌詞を読むと、どうということもない内容です。しかし、笠置シズコの潑刺とした歌唱と、躍動する肉体と融合することで、服部が作った曲は「大爆発」して、日本の歌謡界に旋風を巻き起こすことになります。

♪～東京ブギブギ リズムうきうき 心ずきずき わくわく
海を渡りひびくは 東京ブギブギー
ブギの踊りは 世界の踊り 二人の夢のあの歌
口笛吹こ 恋と ブギのメロディー～♪



笠置シズコの出世作「東京ブギブギ」が世に出たのが昭和23年1月で、黒沢の「酔いどれ天使」の公開が同じ年の4月、彼は笠置シズコの歌のリズムと躍動感に魅了され、急遽「ジャングルブギ」を自ら作詞して、映画の中の一場面挿入したと思われます。なぜなら、私が所有しているこの映画のシナリオ「映画1948-49」(世界文庫 1949年発行)では、「ブギを歌う女」は一行も出てこないのです。



「酔いどれ天使」(東宝 1948 年)

犯罪の横行する街の片隅に、酔いどれではあるが、社会悪を憎み、治療に全力を尽くす町医者をも主人公に、肺を病むギャングとの絡みを通して、黒沢的ヒューマニズムを打ち出した力作」

「映画作品大辞典」(キネマ旬報社刊 1970 年発行)より

映画「酔いどれ天使」は昭和 23 年(1948 年)の第 22 回キネ旬ベストテンの第一位となって、高い評価を受けました。それ以上に、この映画は後の日本映画の担い手となる大島渚、今村昌平、深作欣二といった人たちが、映画界に入った動機に挙げるほどの衝撃

を与え、日本映画の「革命的名作」と言われています。クロサワは後に「僕はヤクザが嫌いで、それを否定するつもりでこの作品を作ったのに、あまりにこの映画のミフネが素晴らしいので、全く違ったものになった」と語っています。

三船敏郎(注4)は6年もの長い軍隊生活を経て、映画界に入るのですが、当時は、外地から帰還して間もないこともあり、闇市からそのままやって来たような「飢えた狼」のごとき面構え(つらがまえ)です。クロサワのシナリオ段階での構想では、彼の演じるヤクザ(暴力団員)は、強がっているが自分の病を知って捨て鉢になり、最後は兄貴分との抗争で死んでゆく「愚かな男」のはずでした。しかし、ミフネの演技は、あまりにリアルな存在感があったために、本来の主演であった志村喬の「酔いどれ天使」の医者でなく、ミフネのヤクザを称賛するがごとき映画となってしまったのです。



彼はこの映画がデビュー 3 作目の 28 歳、黒沢映画へは初めての出演ですが、この映画により一躍スターとなります。黒沢明も、当時は「世界のクロサワ」でも「巨匠」でもなく、新進気鋭の 38 歳。

若いクロサワは、撮影中にテーマが変わってゆくことに気づきながらも、ミフネの存在感を押さえこまないで、そのまま突っ走らせてしまった……それがこの名作を生んだと言えそうです。

クロサワはカサギに「野獣のように歌ってほしい」と要望したといいます。それはまさに焼跡闇市の世界で生きるヤクザ者のミフネの姿であり、「東京ブギブギ」で笠置シズ子表現したものと同質であったのです。彼女の歌は独自の明るい歌唱でありながら、敗戦と焼け跡から再生し、死者を乗り越えて立ち上がろうとする生命のエネルギーであり、「獣の咆哮」でもあったのです。そして、それこそ当時の「日本人の心」そのものであり、クロサワが彼女の歌に求めたものだったのでしょう。その後、「東京ブギブギ」の「リズムと踊り」のパフォーマンスは、当時デビューまもない「美空ひばり」にモノマネされ、10 年後の「ザ・ピーナッツ」、さらに後の「キャンディーズ」から「ピンクレディー」、そして現在の「AKB48」という歌謡界の流れの源流となったのです。

このハットリとカサギの「ブギ・コンビ」は 2 年後の昭和 25 年 7 月、さらに「トンデモナイ流行歌(はやりうた)」を世に出します。今回のカサギは、東京の娘から大阪のオバサンになって、関西弁でまくしたてるという形ですが、この歌詞の長さは前代未聞、異常です。「東京ブギブギ」がスイングジャズの世界なら、こちらは上方漫才の「ミュージカル」ごとき世界であり、彼女の筋金入りの歌唱力とリズム感が、「東京ブギブギ」以上に発揮されているのです。

♪～今日は朝から私の家は てんやわんやの大さわぎ
盆と正月一緒に来たよな てんてこまいのいそがしさ
何が何だかさっぱりわからず どれがどれやらさっぱりわからず
何も聞かずに飛んできたけど 何を買うやらどこで買うやら
それがごっちゃになりまして わてほんまによういわんわ～♪

こんな感じでこの「関西弁歌謡」は3分15秒、間奏なしでえんえん6節も続きます。歌詞の内容は、主婦だか女中だかの「わて」が、沢山の買い物を頼まれて、魚屋や八百屋を廻る話です。魚屋ではくたいに ひらめに かつおに>などとやたらと列挙するわりには、いっこうに買う気配がなく、<お客さんあんたはいったい 何買いまんねん！>と文句を言われ、<しゃけの罐詰おまへんか>などと、その当時にはアリエナイ商品を言う始末。

八百屋ではくにんじん 大根 ごぼう>に始まり、最後は<ボタンとリボンとポンカンと！><マッチにサイダー！><たばこに仁丹！>などと、ワケノワカラナイ商品を絶叫。そして、一節ごとの終わりに、<わてほんまによういわんわ>とか、<あほかいな>とか、<ああややこし>といった大阪弁の「落ち」の言葉が入り、最後は<あーしんど～>で終わります。これはマトモな歌詞ではありません！半分ふざけて書いているとしか思えない、ムチャクチャな内容です。

圧巻は最終節の凄まじい「オッサン連呼」でしょう。<ちよっとおっさん こんにちは>で始まり、<おっさんおっさん これなんぼ>と声をかけ、<おっさんなんぼで なんぼがおっさん！>と絶叫。そして<おっさん！おっさん！おっさん！おっさん！>の連呼の嵐！「オッサン」という言葉は日常生活の呼びかけ用語としては禁句だと思うのですが、(会社編コラム43 参照)この歌の中では、何となんと17回も連呼した挙句に、<わてつんぼで聞こえまへん>という「落ち」がつくのです。(注5)こんなアホな歌詞を誰が書いたのかと、作詞者を見ると「村雨まさお」とあります。それは調べてみると、服部良一の筆名(ペンネーム)なのです。「ハットリ先生」も、さすがにこの支離滅裂な歌詞内容に自分の名前をそのまま付けることをためらった、のでしょうか。

この歌の場合、意味のない言葉の羅列であっても、そこに意味が通じることなどどうでもよく、リズムに乗れることが大事なのでしょう。「それ、おもしろいやないか、やってみなはれ」という関西人らしい心意気がそこに感じられます。大事なのは「理屈」ではなく「気持ち」であり、「遊び」と「冗談」の精神がそこにあります。ハットリはカサギの見事なパフォーマンスにより、関西弁版「大阪のオバサン」世界を表現してみたかったのでしょう。これは戦後歌謡の生んだ最高の「ナンセンスソング」であり、その後、60年代の「スーダラ節」('61 植木等)、そのあとの「帰ってきたヨッパライ」('67 フォーク・クルセイダーズ)などは、この歌の亜流にすぎないと思います。

歌手「笠置シズ子」に関する詳しい文献が見当たりませんでした。わかったことは、生まれは1914年で1985年に70歳にて死去、1948年に「東京ブギウギ」が大ヒットした時がすでに34歳、その後は、映画やTVの脇役のオバサンをしてということ。ブギウギ以前のことについては、大阪松竹少女歌劇出身としかわかりませんでした。今回ネット検索をしてみて、戦前と戦中の活動や、戦後の交際相手の死と、未婚のままでの出産と女手一つでの子育てのこと。そして歌手廃業の理由や生きてゆくための「ギャラ値下げ交渉」など、彼女の「明るく元気なオバサン」というイメージとはうらはらの、辛酸とも言える私生活を知ることが出来ました。

ユーチューブで検索すれば、彼女の歌を画像付きで聴くことが出来ます。便利な世の中になったものですが、TV放映のなかった時代ゆえ、歌のヒットの後に作られた映像のようで、画面劣悪な上に臨場感に欠けます。むしろCDの音声の方が、忠実に彼女の歌唱を伝えているように私には

思えます。しかし、私自身がこの歌が世に出る以前、昭和 24 年生まれです。この時代に居なかった私は、リアルタイムでの直接体験をしていないゆえ、「東京ブギブギの心」は勝手な想像力の世界であり、本当はわからないと言うべきなのかもしれません。



このコラムを書いている最中の 6 月 9 日 8 時、NHK の「歌謡コンサート」にて「笠置シズコメドレー」をやっていました。まだ彼女の名前と歌は、大衆に忘れられていなかったのです。しかし、若手の女性歌手 5 人で歌う「東京ブギブギ」は全くいけません。単に歌詞をなぞっただけで、見事なまでにリズムと魂が欠如しているのです。「平成生まれ」の娘たちに、「笠置シズコの心」を理解しろというのが、しょせん無理な要求なのでしょうが……。それにしても「笠置シズコ」さん、知れば知るほど、あなたはホンマにスゴイ女(ひと)でしたね。

「笠置シズコと服部良一、そしてクロサワとミフネ、皆とっくにこの世におらん
のんじゃが、今だに歌と映画の中で生きとるんじゃのう」

(注1)「歌入り水滸伝」平岡正明著(音楽之友社刊 1974 年発行)

アナーキーなジャズ評論家による個性的な歌謡論です。笠置シズコに始まり、美空ひばりを中心に、都はるみや藤圭子、さらに北島三郎、高倉健まで言及しています。

(注2)黒沢明(1910～1998)

「姿三四郎」(43)で監督デビューし、戦後は多くの名作を発表。

代表作は「酔いどれ天使」(48)野良犬(49)羅生門(50)生きる(52)七人の侍(54)

用心棒(61)赤ひげ(65)影武者(80)乱(85)など多数あり。

ひたむきな人間の行動をダイナミックな手法で描く演出力は、海外でも評価が高く「世界のクロサワ」と呼ばれる。

(注3)服部良一(1907～1993)

戦前は「別れのブルース」「蘇州夜曲」「湖畔の宿」などジャズを基調とした和製ポピュラーを生み、戦後は「東京ブギブギ」「青い山脈」など多数のヒット曲を重ねて人気作曲家となった。

(注4)三船敏郎(1920～1997)

デビュー作は「銀嶺の果て」(47)、黒沢監督と「酔いどれ天使」で出会い、以後「赤ひげ」(65)まで 16 本の黒沢作品に出演。1962 年に三船プロ設立後は、「黒部の太陽」「風林火山」など発表。外国映画にも多く出演し、「世界のミフネ」と呼ばれた。カメラ助手志望で東宝に願書を出したら、俳優募集にまわされ、「おかしくもないのに笑えるか」と言ったとか、採用後に監督が出演依頼をしたら「男は顔でメシを食うものじゃない」と言った、という逸話が残っています。

(注5)＜わてつんぼで聞こえませんか＞という歌詞は「日本流行歌史」(社会思想社 1974 年増補版)より記したのですが、私の買った CD には＜聞こえませんか＞とだけの歌詞となっており、「落ち」になっていません。「つんぼ」という言葉が「放送禁止用語」であるため、いつの段階かで「意図的に」変更されたようです。なおユーチューブは原曲のままです。

◎「戦後歌謡」のコラムは、一回だけのつもりで書き始めたのですが、3 回に分けて書かざるをえないボリュームになってしまいました。歌謡曲にはウイイことを自覚していますので、私の独断と偏見による「体感的歌謡論」として読んでいただきたいと思います。